

「対論 邪馬台国」

高島忠平

1、邪馬台国論争の基本と意義

邪馬台国は、すぐれて魏志倭人伝といった文献の解釈・理解の問題であると同時に、日本古代国家の成立を、どのように見とおすかの歴史理論上の問題でもある。

日本の古代国家は、一般に言われているように七世紀後半に成立した律令国家をもって確立した。この国家は、中央及び地方の行政組織を、日本列島の大部分、東北・北海道および南九州・沖縄を除く地域に張り巡らし、列島を政治的に統一した初めての政権である。こうした列島の統一政権である律令国家が、どのような成立の道筋を経たか、つまり、日本古代国家成立の理論的過程を見通すと、三世紀には、列島の大部分を統一した政権の存在が考えられるか、或いは考えられないか、によって日本列島における国家形成の過程(道筋)が、まったく異なってくる。邪馬台国の時代というのはそうした時代であり、卑弥呼の都(御家抛)した邪馬台国の所在地問題は、日本列島における国家成立の謎を解く極めて大きな課題となるものである。

邪馬台国は、紀元二・三世紀、日本列島の何処かに存在したはずの日本の原初的な小国家である。邪馬台国の名は、「魏志倭人伝」、正確には『三国志魏書東夷伝倭人の条』にある。倭人の条はわずか漢字二千文字たらずであるが、二・三世紀の日本列島における倭人の社会、政治、風俗、習慣、産物、自然、地理など、まとまった形で表した最古の文献であるといえる。

2、魏志倭人伝の概略と主旨

- 1) 邪馬台国は、合わせて約三十の小国家と、「邪馬台国連合」とでも呼ぶべき地域的な政治勢力を構成していた。
- 2) その頂点にいたのが、三十国によって共立された女王卑弥呼で、「鬼道」において、優れた霊力を有し、邪馬台国に都(御屋抛)をおいていた。
- 3) この「邪馬台国連合」は、別の勢力、男王卑弥弓呼の狗奴国連合勢力と、永年にわたって、戦いを続けていた。
- 4) 卑弥呼は、この戦いに有利に立ち、倭地における覇権を掌握するために、当時の東アジアの宗主国、魏の国の皇帝に使者を送り、支援と倭王としての地位・身分を依頼した。
- 5) 魏の皇帝はそれに応え、卑弥呼は、「親魏倭王」に封ぜられ、金印・紫綬と多くの品物を、使者と共に賜った。

- 6) 卑弥呼は、己の威を誇示し、邪馬台国連合の勝利を目指そうとしたが、やがて亡くなり、徑百余歩の墳丘に、多くの殉葬者を伴って葬られた。
- 7) その後、男王が立ったが、治まらず、国々が戦い多くの死者がでた。それで宗女（一族）の壹(台)与が女王となって、治まった。
- 8) 「租賦を取む、邸閭有り、国々に市有り、有無を交易す、大倭をして監せしむ」と既に租税制度があり、それを収納する倉や、備蓄の軍事的倉庫が設置されている。さらに、官設の市があり、「大倭」という身分によって、管理されていた。
- 9) その他

魏は、日本列島の倭地における邪馬台国に都を置く卑弥呼の連合勢力と、狗奴国に都を置く卑弥弓呼の連合勢力との間の政治抗争に強く関心を寄せて、干渉したのである。

10) 魏志倭人伝記述以前の倭（人）について

* 楽浪海中倭人有り、分かれて百余国を為す、歳時を以て来たり、献見巢という。(漢書地理志一班固)

* 蓋国は、鉅燕の南、倭の北に在り、倭は燕に属す(山海経)

* 倭は暢草を献ず(論衡—王充—後漢—)

- * ・倭は韓の東南大海中にあり、山島によりて居をなす。凡そ百余国あり、武帝、朝鮮を滅ぼしてより、使訳に通ずる者、三十許なり、
- ・ 国皆王を称し、世世統を伝う、その大倭王は邪馬台国の居る。楽浪郡徼はその国を去る万二千里、その西北界拘邪韓国を去ること七千余里
- ・ 建武中元二年、倭奴国、奉貢朝賀す・・・倭国の極南界なり、光武、印綬を以てす、安帝の永初元年、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願う。
- ・ 女王国より東、海を渡ること千余里、拘奴国に至る、皆倭種なりといえども、女王国に属せず。(後漢書)

3、卑弥呼の王権のしくみ

* 近畿説をとれば、卑弥呼の政権は北部九州を含む広い領域の政権。

* 九州説をとれば、卑弥呼の政権は北部九州に限られた地域的政権。

* 日本国家成立史をめぐる極めて大きな差異であり、国家の起源にかかわる重大な問題。

近畿説—邪馬台国はヤマト政権の前身または母体。畿内中心史観。

九州説—九州政権の東遷、東征、近畿の勢力が、ヤマト政権となり、4世紀以降、あるいは6世紀以降に九州の政権を服属。

- 1) 対馬、壱岐、末盧、伊都、奴、不彌の九州各国を含む二十九国の共立による王権。
- 2) 卑弥呼の巫女王（神聖王）と男王（世俗王）とによる二重政体王権、政権の二つの顔
- 3) 諸国の王からかけ離れた王権ではない。
- 4) 各国に官、副、卑奴母離など官制的なものがあつた。しかし、卑狗、爾支、兎馬觚、

多模、彌彌、伊支馬、弥馬升、弥馬獲支（わけ）など官名より人名か身分で、各地の大小の首長の称号の可能性が高い。

- 5) 一方、卑弥呼王権の諸国を統制する官名とみられる一大卒、辺境におかれた卑奴母離（夷守）などがあり、氏族社会の身分と官制が未分化な段階。大倭を邪馬台国が派遣した官というせつがある。また、大人のなかの有力者とみる考えもある。
- 6) 大人と下戸や奴婢、生口、持衰などの身分・階層があり、社会構成員の間で、身分秩序は、はっきりしていた。
- 7) 「国」の成立、「国々」の連合（邪馬台国連合）は、古代国家形成の端緒。
- 8) 中国の王朝を宗主国とする東アジアにおける国家群の一つとしての邪馬台国連合。
- 9) しかし、各国は独自の外交権をもっている。
- 10) 邪馬台国連合と、狗奴国連合とは、より大きな政権の覇権を把握するため、長年戦い、その結果、ツクシ政権を形成した。一方、邪馬台国連合（政権）は、ヤマト政権がツクシ政権を抑えて成立したという近畿説の見方もある。
- 11) いずれにしても、当時の国は、現在、あるいは古代律令国家の郡の領域或はその単位で形成されていたことは間違いない。律令期の郡の数は、律令国家の領域である日本列島の東北・北海道・沖縄を除く地域に約400ある。
- 12) はたして卑弥呼が支配した約三十足らずの国々は、どのように日本列島各地に、存在するのか。

4、考古学からみた邪馬台国

1) 近畿説のポイント

- * 卑弥呼の墓を、奈良県桜井市の箸中古墳とする。「径百余歩」との整合性。
- * 三角縁神獣鏡を卑弥呼が魏の皇帝から下賜された百枚の鏡とし、その分有関係。
- * 三角神獣鏡日本列島製作説があるが下賜するための葬具として、卑弥呼が作らせ、配布したと考える
- * 最古の前方後円墳の大和での成立説。年輪年代測定法、C14年代測定法などによる古墳の年代の遡上。
- * 連合勢力による邪馬台国の建国。大和における古墳時代前史の希薄さ。

2) 九州説のポイント

- * 卑弥呼の鏡は、連弧文鏡など、後漢系の鏡。それが、北部九州を中心に分布。
- * 吉野ヶ里遺跡を代表に、環壕集落の「倭人伝」との記述とよく符号する。
- * 国の領域や成立過程が明らか。
- * 弥生時代後期後半の時期に大規模な環壕集落が出現する。年代は、これまでの中国の資料との比較で、2・3世紀邪馬台国時代にあたる。

3) 邪馬台国東遷・東征説のポイント

* 北部九州弥生時代文化の諸要素（とくに鏡・劍・玉による表象性）が、近畿の古墳時文化に見られる。

* 神武東征神話の背景。

5、巫女王の出現と成長——卑弥呼の登場——

弥生時代中期初頭から前半の北部九州にみられる古武高木遺跡・袖比本村遺跡・吉野ヶ里遺跡など首長墓と祭殿が一体となった宗廟ともいべき祭儀の場の出現は、祖霊祭祀の確立とその社会での支配的秩序にまで成長したことを如実に物語っている。

こうしたなかで弥生時代の巫覡は、祖霊祭祀の発達とその祭儀を担うなかで、より高い霊能力をもつものが選別され、社会の他の成員と同様に階層分化し、社会的に高い地位をもった巫覡が登場するようになった。そのことは、北部九州の弥生時代中・後期の墳墓の埋葬様式とその変化の中によく現れている。それは、まず巫術の道具である多紐細文鏡や貝釧を副葬する人物の登場に始まり、やがて巫術の祭器は、祖霊の依り代として中国製の銅鏡が用いられるようになるが、次のような図式で巫女王の出現の過程が見てとれる。

銅鏡は、巫術の政治的・社会的成長のなかで、その所持者の身分とその権威をも表象する威信器でもあった。

『弥生中期初頭多紐細文鏡副葬の甕棺墓——弥生中期中頃多量の貝輪を着装した人骨埋葬の甕棺墓（佐賀県花浦）——弥生中期後半漢式鏡副葬の甕棺墓（福岡県三雲1号・2号および同立岩堀田10号・28号）、弥生中期末多量の貝輪副葬と棺外破鏡をもつ甕棺墓（佐賀県吉野ヶ里350調査区）——弥生後期前半後漢鏡・銅釧・玉・太刀を副葬し、近接して営まれた同時期の二基の甕棺墓（佐賀県桜馬場）——弥生後期後半多量の棺外破鏡をもつ墓（福岡県平原）』

社会的地位を高めた巫女は、地域的政治的社会、「国」の成立と進展とともに、「国」社会統治の一端を担うようになる。それは、三雲遺跡の1号棺・2号棺にみられるように、世俗王（1号棺）と巫女王（2号棺）の二重政体による一国の支配（統括）の一方を担うようになるのである。立岩遺跡の10号棺と28号棺の関係にもみることができる。やがて、「国」相互の戦い、混乱が拡大する中で、巫女王は「国」や「国」連合の統治の主役を担うようになる。私は、平原遺跡の多量の「破鏡」を棺外に封じて埋葬された被葬者に、一つの「国」を超えた多くの国を支配するまでの霊力をもつまでに成長した巫女王の存在をみることができると考えている。破鏡を棺外に配する埋葬例は、弥生時代の北部九州に多く見られる。こらは、被葬者あるいはその霊力のこの世への不帰を祈願する呪的行為と考えられる。したがって、破鏡のほとんどは復元しても完形とはならない、鏡体のほとんどあるいは一部が欠失している。平原遺跡に見られる多量の大小の「破鏡」は、この被葬者の卓越した霊力を封じるためであった。

女王卑弥呼は、祖霊神と人との間をつなぐ優れた霊力をもち、ある種の儀礼でもって神がかりとなり、ひとびとに、祖霊の託宣を告げる卓越した霊力を持つ巫女であった。2・3世紀には、三十の「国」を統治できるような巫女王が出現していたのである。女王卑弥呼は、縄文時代以来の巫覡が、農耕社会の成立を前提とした祖霊信仰の発展を背景に、その儀礼を担う中で、社会的地位を確立していった結果として、登場した巫女王といわねばならない。こうした巫女王成立の過程と成長過程が、読み取れるのは北部九州以外にはない。巫女王成立の歴史的過程が読み取れないところには、卑弥呼のような巫女王は浮上できない。

6、邪馬台国連合の秩序

三国志・魏書三十卷東夷伝の冒頭に、東夷伝を記した。それによると、東夷（倭人も当然含む）の地域は、「礼」がよく行われる社会であるとし、その慣わしを記すことの重要性を述べている。礼は祖霊祭祀を中心とした信仰と儀礼で、中国古代社会の政治秩序・身分秩序でもある。したがって、倭人の社会である弥生時代において、『礼』の中心である祖霊祭祀の儀礼を考古学的にみていくと、弥生時代中期前半（紀元前 2・1 世紀）の北部九州の人工的な盛り土で造られた首長や祭司である特定身分の墓域である「墳丘墓」と、その継続的な祭祀と祭具や施設に、初めて見ることができる。

首長や祭司は、墳丘墓に銅剣や鏡などの身分を表す副葬品をともなって埋葬され、生前の身分を伴ったまま祖霊となる。祖霊は、卑弥呼（巫女王）の「鬼道」といった宗教的儀礼の憑依儀礼によって、託宣をを行い、その託宣でもって、国や社会を導くのである。祖霊の依りつく立柱の跡、祖霊が依りつく青銅の鏡、拝殿の跡、神懸かりの儀式や政治儀礼が行われる大型の祭殿の跡などが、墳丘墓に律せられて配置されている。このような祖霊祭祀の施設が、まとまって発見されているのは北部九州にしか見られない。このような儀礼が、次第に、時代とともに、東の方へと広がっていくのが、確認されている。

さらに、「倭人伝の市」は、魏志倭人伝の記述から見て「官設の市」である。その条件は、壁（城柵）がめぐり、門が開き、店（広場）・倉・市楼（市の管理施設）が必要であり、首長（王）の王城（都・御家拠）と結合した市の跡は、弥生時代後期（1～3 世紀）の吉野ヶ里遺跡の「市と倉」と空間構成に、はじめて見られる。その他は、北部九州の比恵・那珂、三雲、原の辻、平塚川添遺跡など、弥生時代の中核的集落において、その条件をみたせる様相がある。

7、まとめ

魏志倭人伝には「使譯の通ずるところ、三十国」と書いてあり、各「国」は一定の自立性があり、独自の外交権を持っていた。これらの「国」の成立過程と領域については、吉野ヶ里遺跡、原の辻遺跡などの調査結果や「末盧国」、「伊都国」、「奴国」など所在地の

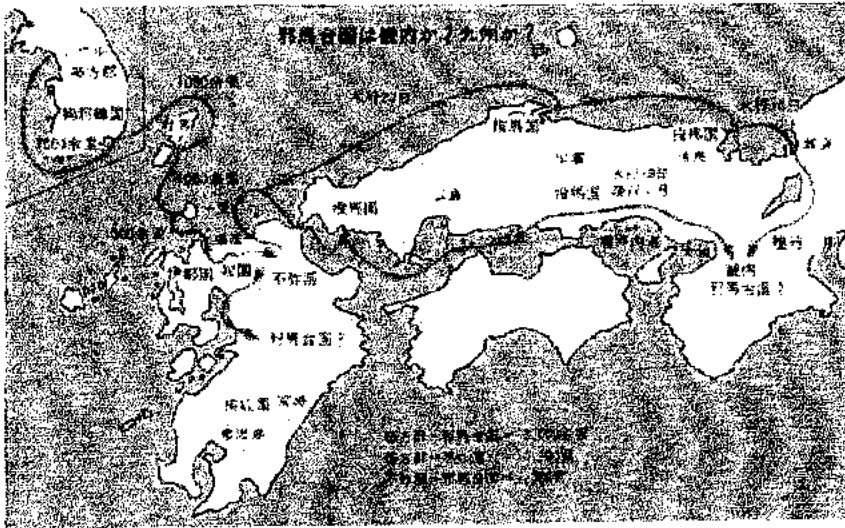
明らかな地域の考古学の検討結果から、現在あるいは律令国家期の郡とほぼ一致することが明らかになってきている。

卑弥呼が統括した三十国は、こうした「国々」(小国家)の連合で、私にすれば、部族連合にあたる。一方、この卑弥呼或いは邪馬台国連合は、魏志倭人伝によれば、狗奴国を中心とする他の部族連合と、永い間、仇敵の間柄として戦っている。卑弥呼はこの争いに優位に立つために、魏に使者を送り、魏は卑弥呼の要請に応じて戦いの一方に加担をした。魏志倭人伝は、日本列島の各地域に、部族連合が割拠し、互いに戦い、次なる時代の拡大する政治勢力確立のイニシアチブを取ろうとしている様子を、卑弥呼が統括する勢力地を中心とした政治状況を軸にえがいている。

また、魏志倭人伝は、倭地をめぐって、少なくとも、卑弥呼(邪馬台国)を中心とした勢力と卑弥呼を(狗奴国)を中心とした二つの勢力が別個に存在していることを明記しており、倭地を統一した勢力の存在は記していない。このことから見ても、三世紀に、日本列島を統一した政権の存在は考えられない。邪馬台国は、日本列島の一地域それも九州北半部における部族連合の盟主であり、卑弥呼はそこに都を置いたと理解するのが素直な解釈であろう。

「魏志倭人伝」が記す邪馬台国をはじめ倭の「国々」や倭人社会の政治・信仰・文化・経済・風俗・習慣などは、少なくとも、縄文時代・弥生時代という歴史のなかで形成されてきた「歴史的存在」である。中国を宗主国とした東アジアにおける前漢・後漢・三国・晋にかけての政治・社会的動向と連動した倭人社会の、卑弥呼の「鬼道」のように祖霊信仰を中心とした政治・社会秩序形成並びに「国」の形成・連合・抗争は、どのようなものであったのか、岡崎敬がかって追い求めたように、地域考古学の成果を「歴史の輪」して地道に構築していかなければならない。そうしたなかで、邪馬台国は自ずと浮かび上がってくるのではないか。

近畿地方に古墳時代文化の素地が認められないからといって、他地域との政治連合や他勢力による東遷・東征に「邪馬台国」の成立を求める考えは、近畿における内的な歴史要因を、徹底極めようとしない手法で歴史の方法ではない。また、「ヤマト王権」あるいは「律令国家」という結果から、それへ向けてなにもかも集約しようとする「畿内史観」も、ためにする論といわざるをえない。その結果、近畿地方に「邪馬台国」より大きな、または、優れた文化をもった「大国」があっても、私はいっこうにかまわない。



『邪馬台國への道』より

邪馬台國は
どこにあったか